

## ⑦ やさと茅葺き自転車散歩

日程 平成 23 年 12 月 24 日 (日)

場所 石岡市内の茅葺き民家および関連施設、一般道路・自転車道

対象 自転車の好きな一般市民

参加者 計 21 人

コース 全行程 約 50 km

J R 常磐線高浜駅→常陸風土記の丘 (石岡市染谷) →木崎眞家・木崎清彦家 (石岡市上青柳) →綿引家・三輪均家 (石岡市上曽) →かまたや (石岡市柿岡) →佐久良東雄生家 (石岡市浦須) →大場家 (石岡市佐久) →常陸風土記の丘または J R 常磐線岩間駅

やさと地区の茅葺き民家は、広いエリアに散在しています。これらを巡るとともに、周辺の農村景観を味わうツールとして注目されるのが自転車です。当会ブログのサイクリング記事や、自転車雑誌に紹介された、やさとのサイクリング記事への多くの反響に応じて、自転車散歩を案内しました。

コース設定およびガイドは、フリーライターを本業として 25 年にわたり自転車関連誌の編集やイベント運営に携わり、当会事務局の一人でもある新田穂高が務めました。また、訪問した各民家では、家主による説明および質疑応答も行われました。

参加者は日頃からスポーツ車に乗ってサイクリングに親しむ愛好者から、歴史に興味があり普段乗りの一般車で走った人までさまざま。時速 10～15km のスピードで里の風景と茅葺き民家をゆっくりとつないで走ります。

「一人では絶対に見られない民家をていねいに案内してもらい、すばらしい企画だった」

「ふだんは走らない集落をつなぐルートには、里の懐かしい風景がいっぱいで、これまで気がつかなかった地域の魅力を知った」

「東京からわりと近いのに、茅葺き屋根や静かな田舎道があったのにはびっくりした」

などの声が聞かれ、イベントの様子は、その後、参加した何人かの愛好者のブログでも紹介されました。



上) 朝からゆっくりと茅葺き屋根をめぐるしました。8カ所めの大場家に到着 右上) まわりの風景を楽しむのは自転車ならではの楽しみ 右下) 旧街道沿いに建つ綿引家。昔の旅人に思いをはせます



参加者にはガイドなしでの走行もできるよう、当日スタート前にルートマップを配布しました



サイクリストのあいだで知られるコース投稿サイト「ルートラボ」を活用してコースを紹介、当会ブログページよりリンクを行って、参加者およびサイト閲覧者への情報提供をはかりました

## ⑧ ブログ・やさと茅葺き屋根保存会だより

筑波山麓の茅葺き民家と茅場の営みや、それらを支える地域の農村文化を紹介するブログです。イベント情報については、本年よりコンテンツ内に参加申し込みフォームを設けて、これまでの電話申し込みに加え、WEBによる申し込みを受け付けました。

また、自転車散歩のコースガイドでは外部リンクを活用して詳細な地図情報を掲載するなど、WEBの特性を生かした内容とし、読者獲得から、さらに一歩踏み込んだイベント参加者の掘り起こしを図りました。

なお、事業期間中のアクセス数は約12,000件です

The screenshot shows a Windows Internet Explorer browser window displaying the website. The address bar shows '312/10/post-d10b.html'. The page title is 'にほんの里100選/やさと茅葺き屋根保存会だより'. Below the title is a short introductory paragraph. The main content area features a date '2012年10月10日(水)' and a post title '差し茅'. The post text describes the traditional thatched roof technique and includes three photographs showing workers on ladders repairing the roof. The right sidebar contains navigation links such as 'メール通信', 'カテゴリ', 'やさとのみどころ', 'やさとの茅葺き民家', '事務所だより', '保存会の紹介', '活動報告', '目次', '筑波山麓茅葺き民家の技', '茅葺き屋根 Q&A', '行事予定', '見学について', and 'リンク'.

# 講演 やさとの農村景観、その価値と可能性

黒田乃生 筑波大学芸術系准教授（世界遺産専攻）

平成 25 年 3 月 3 日（日）  
朝日里山学校音楽室にて



黒田「こんにちは。午前中に歩かれた方は、引き続きになりますが、しばらくおつきあいください。私はこれまで、おもに世界遺産について、たとえば岐阜県の白川郷などをフィールドに研究してきました。やさとを訪ねたのは今回が3、4回目なので、みなさんのほうがお詳しいです。最初に、会場のみなさんから、やさとの印象を伺えますか？」

会場「今日はやさとの外から来ました。これまで筑波山に登ることはあっても、裏側のやさとにはそれほど来る機会はなかったんです。昨年、朝日トンネルができて近くなりましたね。東京から近いところなのに田舎の景色が残っているのにはびっくりしました」

会場「私は地元です。やさとはすべてが、いいですよ。美しい緑ときれいな水と雰囲気と。茅葺きにマッチした景色がすばらしいと思っています」

黒田「やさとがすばらしいのは、地元の方が誇りをもって風景を自慢にされてるところです。何度か訪れて、すごいなと感じています。今日はそのやさとについて、景観という視点から少しお話しさせてください」

## 景観をとらえる3つのスケール

### 筑波山麓／農地・家・山／屋敷の構造

景観を考えるにあたって、まず、やさとを大中小3つのスケールから考えてみます。大きくとらえると、石岡市のやさと地区は、つくば市の北条や小田、桜川市の真壁や岩瀬などとともに、筑波山をとりまく地域

のうちの一つです。これらの地域にはそれぞれ特徴があります。その特徴の持つ価値をみんなで一緒に考えて、生かせばいいですね。つまり筑波山麓は、ひとつの大きな文化的景観ととらえることができます。

つぎに中くらいのスケールで眺めてみましょう。先ほど歩いて見たように、小桜地区では、山すそに家が集まって、その前に耕地が広がり、家々の背後には生活に利用していた里山があります。あたりまえのように思われるかもしれませんが、じつは景観の構造というのは、たとえば、農地のなかに点々と建物がある散居村とか、地域によってさまざまなんです。農地、家、山でつくられる景観の構造。これは、やさとの持つ特徴です。田んぼのまんなかになどと大きい建物がたったりすると、この構造が壊れてしまいます。

小さいスケールは、たとえば見学で訪ねた坂入家です。茅葺きの主屋の裏には竹林があって、山林へとつながっています。前の庭には蔵があり、蔵の前にはモチノキの垣根がつけられていました。昔から保たれた伝統的な構造です。もし主屋が茅葺き屋根でなかったとしても、この屋敷地の構造が残っていれば、それにも価値があります。一つ一つの建物だけでなく、建物などの構成が残っていることが非常に大事なんです。家があって、蔵があって、門があって、生け垣に囲われていたり、石垣がつけられたり。こういうかたまりが一つの単位としてとらえられるわけです。

## 時代とともに変化した農業の形態

### 変わらない景観の構造

このように景観をいろんなスケールで見えていくことに加えて、もうひとつ大切なのは、歴史的な側面です。景観が時代とともにどう変わってきたか 調べなければなりません。地域の方に伺って、土地がどう使われていたのか、ていねいに洗い出していきます。

おおざっぱには航空写真でも分かります。これは昭和22年、1947年に撮影した小桜地区です。ほとんどの建物が茅葺きでした。つぎの写真は1970年代のもので、何人かの方に伺うと、いちばん変わったの